

弥源太殿御返事

文永一一年二月二日 五三歳

抑 そもそも 日蓮は日本第一の びやくにん 僻人なり。其の故は皆人の父母よりもたかく、主君よりも大事におもはれ候ところの阿弥陀仏・大日如来・薬師等を御信用ある故に、三災七難先代にこえ、天変地天等昔にもすぎたりと申す故に、結句は今生には身をほろぼし、国をそこなひ、後生には大阿鼻地獄に墮ち給ふべしと、一日片時もたゆむ事なくよばわりし故にかゝる大難にあへり。譬へば夏の虫の火にとびくばり、ねずみがねこのまへに出でたるが如し。是あに我が身を知って用心せざる畜生の如くにあらずや。身命を失ふ事、しかしなが 併ら心より出づれば僻人なり。但し石は玉をふくむ故にくだかれ、鹿は皮肉の故に殺され、魚はあぢはひある故にとらる、すいは羽ある故にやぶらる、女人はみめかたちよければ必ずねたまる、此の意なるべきか。日蓮は法華經の行者なる故に、三類の強敵あつて種々の大難にあへり。然るにかゝる者の弟子檀那とならせ給ふ事不思議なり。定めて子細候らん。相構へて能く能く御信心候ひて、りょうぜん 靈山浄土へまいり給へ。

又御祈禱のために御太刀同じく刀あはせて二つ送り給はて候。此の太刀はしかるべきかち作り候かと覚へ候。あまくに、或は鬼きり、或はやつるぎ、異朝にはかむしゃうばくやが 剣に争でかことなるべきや。此を法華經にまいらせ給ふ。殿の御もちの時は悪の刀、今仏前へまいりぬれば善の刀なるべし。譬へば鬼の道心をおこしたらんが如し。あら不思議や、不思議や。後生には此の刀をつえとたのみ給ふべし。法華經は三世の諸ほっしん 仏発心のつえにて候ぞかし。但し日蓮をつえはしらともたのみ給ふべし。けはしき山、あしき道、つえをつきぬればたをれず。殊に手をひかれぬればまるぶ事なし。南無妙法蓮經は死出の山にてはつえはしらとなり給へ。釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取り給ふべし。日蓮さきに立ち候はゞ御迎へにまいり候事もやあらんずらん。又さきに行かせ給はゞ、日蓮必ず閻魔法王にも委しく申すべく候。此の事少しもそら事あるべからず。日蓮法華經の文の如くならば通塞の案内者なり。只一心に信心おはして靈山を期し給へ。ぜにと云ふものは用にしたがって変ずるなり。法華經も亦復是くの如し。やみには灯となり、渡りには舟となり、或は水ともなり、或は火ともなり給ふなり。若し然らば法華經は現世安隱・後生善処の御經なり。

其の上日蓮は日本国の中には安州のものなり。総じて彼の国は天照太神のすみそめ給ひし国なりといへり。かしこにして日本国をさぐり出だし給ふ。あはの国御くりやなり。しかも此の国の一切衆生の慈父悲母なり。かゝるいみじき国ならん。日蓮又彼の国に生まれたり、第一の果報なるなり。此の消息の詮にあらざれば委しくはかゝらず、但おしはかり給ふべし。

能く能く諸天にいのり申すべし。信心にあかなくして所願を成就し給へ。女房にもよくよくかたらせ給へ。恐々謹言。

二月廿一日

日蓮花押

弥源太殿御返事